

## 徳島県のサツマイモ（なると金時）の生産について

徳島県鳴門藍住農業支援センター

### 1. 産地の概要と経緯

徳島県のサツマイモ生産は、農林水産省「作物統計」の平成18年実績で作付面積1,230ha；収穫量27,300tと、熊本県に並ぶ全国5位であった。県東部の海岸沿いの鳴門市・松茂町・徳島市・北島町の2市2町の生産は、面積1,050ha；収量24,120tと、県全体の9割を占め主産地を形成している。

本県へのサツマイモの伝来は250年前頃とされ、主産地域では江戸後期の200年前と伝えられている。砂丘地が点在する地域では、サツマイモ+麦の自給生産がワカメ採取などの沿岸漁業と、半農半漁の経営形態で続けられてきた。昭和初期には、現在の鳴門市里浦地区から生産量の10%程度が阪神市場へ出荷されていたという。

戦中～戦後の食糧難時代には栽培が盛んとなり、ピークを迎えた昭和30年には、5,800haの作付で102,900tの収穫があった。当時の生産の中心は、県北部の阿讃山麓の畑地帯であった。35年以降には農基法の選択的拡大によって、4,000haから1,300haまで減反した。東部地区でも、昭和44年には作付面積が543haの最少を記録し、この

徳島県のかんしょ生産の年次推移

(ha : t)

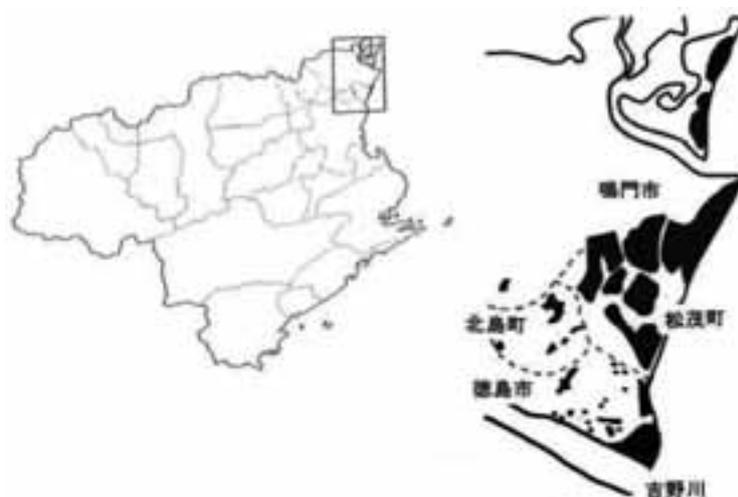
年度	作付面積			収穫量
	主産地	その他	県計	県計
S 30	-	-	5,800	102,900
36	705	3,455	4,160	62,500
40	573	2,377	2,910	36,100
45	604	916	15,20	26,300
50	943	407	1,350	28,200
55	985	315	1,300	22,800
60	994	246	1,240	26,800
H 2	1,070	250	1,320	25,700
7	1,102	228	1,330	28,300
12	1,093	187	1,280	29,100
17	1,083	157	1,240	29,600
18	1,050	180	1,230	27,300

農林水産統計（主産地：2市2町の合計）

頃までに自給的生産の山麓地域から青果出荷用の海岸地域への産地移動がうかがえる。

### 2. 砂地畑の造成と手入れ砂

本県には日本海側のような砂丘地の発達は少なく、造成された砂地畑が大半を占めている。客砂



徳島県のかんしょ産地所在図

には、吉野川河口部への堆砂や瀬戸内海東部の浚渫海砂が長年用いられてきた。

昭和40年頃までに農家の自力によって約200haが造成された。当時の砂地畑地造成には、塩業地である鳴門の製塩燃料であった石炭殻を埋め、その上に海岸の砂を客土する方法が用いられた。このような取り組みは、戦後すぐの南海地震で圃場が地盤沈下し、塩害による水稲作の減収が常態化したためといわれる。

一方44年から米の生産調整がはじまったことで、周辺の湿田地帯を対象に大規模な砂地畑造成が行われ、50年までに218haが造成された。転作対象面積としても、60年には386haがカウントされるまでに拡大し、全体では500ha以上の増反が達成された。

造成畑の砂地層は1m以下で、平坦なこの地域では、冬の季節風により10アールから数十トンが飛散してしまう。連作年数の長いほ場では、砂が摩滅してシルト化して物理性が悪化することで、イモの収量・品質が低下する。このため数年に1度、10アールに20～30トンの砂を「手入れ砂」と呼ばれる、客砂の追加をする方法がとられてきた。

吉野川上流部での大型ダム整備にともなって、河口部への堆砂が減少し、瀬戸内海の砂利採取も環境保全の観点から全面禁止された。砂の入手が困難となる中で、代替用の砂について、資材輸入まで視野に入れた試験研究が取り組まれた。近年では、大型公共工事による排出砂や中流域での堆砂除去、砂利採取から再選別した砂の利用が試みられている。

### 3. 品種・栽培技術の改良

昭和31年に青果用サツマイモの岐阜1号、35年

には高系14号が導入され、後作の冬だいこんとの輪作体系も確立された。昭和41年にポリマルチ栽培が導入され、早掘り栽培が普及した。昭和54年頃には、土佐紅・坂出金時が導入され、これらから「なると金時」が選抜・育成された。昭和61年には、ウイルスフリー苗の作出によって、自家選抜の種芋栽培から購入苗へと100%転換した。

### 4. 今日のサツマイモ栽培

現在の栽培作型では、2月に育苗ハウスへフリー苗を導入し、3月中に畦立てマルチ・土壤消毒を終え、4月上旬から6月中旬にかけて挿苗される。本ほでの生育日数120日を目安として、7月下旬から11月にかけて収穫される。10月までは早掘り出荷し、以降は定温貯蔵したものを、市況をにらんで翌年6月頃まで出荷される。

地下水位が50cm前後と高いほ場が多く、畦巾65cm×畦高40cmの「かまぼこ型の高畦」で、全面マルチ栽培を行っている。挿苗から生育初期に地温確保が容易で、降雨の多少に関わらず土壌水分が保たれ、マルチ内では適地温となり、着色と肌の良いイモが育ちやすい。

早生作型のかんしょの後作には、秋冬だいこんが輪作体系で作付けされる。9月上旬から10月末までには種され、11月からかんしょ作のほ場準備の始まる2月末にかけ、貯蔵かんしょと平行して出荷される。だいこんの作付けは、かんしょ作の2分の1程度であるが、生産者の高齢化や市況低迷から減少傾向にある。後継者のいるかんしょ農家の経営面積は2ha前後だが、かんしょ専作による拡大の意欲が高く、4ha規模の経営も出現している。

砂地畑における作付け体系

月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2
かんしょ	ハウス内育苗												
	挿し苗			収穫・出荷・貯蔵（～翌年6月）									
だいこん	は種								収穫・出荷				

## 5. 将来展望—灌がい施設の整備と地域ブランドの取得—

主産地域は瀬戸内海式気候に属し、サツマイモの生育期に500mm以下の降水しかなく、蒸散量が上回っている。最近では温暖化の影響からか、挿苗時や梅雨明け後の生育中期、早い作型のダイコンのは種期に、乾燥が続き生育障害が発生しやすくなっている。用水路整備がなされている地区でも、灌排分離ができていない事や地下水の塩水化もあって、水質面からも灌がい水の利用が困難であった。

国営総合農地防災事業として、塩害を防ぐための「吉野川下流域農業用水」の幹線整備が進められ、平成21年から一部地区で供用開始されることとなった。渇水年での試験栽培では、単位面積あたり20%程度の収穫増が実証でき、今後の高品質・多収への生産技術確立への期待が大きい。

「なると金時」は、砂地畑で生産されるかんしょとして、平成19年度に地域団体商標の認証を受けた。本県のかんしょの販売は、JA・全農を通して市場流通される割合が高く、青果仕向の比率が高

いことが特徴となっている。この特性を活かして、流通チャンネルの多元化を図るような多彩な商品づくりが模索されている。各JAごとに「里むすめ」「松茂美人」「甘姫」等、個別のブランド化を進め、かんしょを加工原料とするイモ焼酎や菓子類はもちろん、かんしょ以外の品目についても消費者サイドに向けた産地PRに努め、ブランドのイメージアップを図ってきた。今後より安心安全な商品ブランドを確立するために、環境に優しい栽培技術の導入や地域GAPの取り組みが求められる。

主産地域では、先人の力で造成された砂地畑で生きる以外に農業持続の道がなく、迷いのない営農体系を立てざるをえない。他産地に比べ将来を担うべき後継者層の豊富さが、産地としての最大の力となっている。

デフレ不況下での産地受難の状況が、しばらくは続くことが見込まれるが、このマンパワーを活かして、ブランド産地の地位を守りさらなる発展を図るべく、関係機関としても強力なサポートにつとめたい。

### 投稿のお願い

特産農作物は生産規模が小さく、且つ、特定地域に特化した形で生産されており、その情報は限定されております。各産地の取組む作物・気候等の条件は違っても、種々の断片的な情報であっても、他産地の情報1つ1つが生産の振興・改善のたたき台として、それぞれの特産農作物、地域特産振興の一助になるのではないかと考えます。

このような視点から、特産農作物に関する論説、種苗供給や栽培等技術論、品種：栽培等試験研究成果、産地の取組状況、産地紹介、イベント紹介等々、種苗に絡んだ幅広い分野についての投稿を歓迎致します。

### 〔原稿作成要領〕

1. 原稿は、パソコンのワープロソフトで作成し、Eメールの添付ファイルまたはディスク(FD、CD)で送付下さい。(OSはWindows、ソフト:本文は一太郎またはWord、図表などはExcel、Wordを希望します。)
2. 本文原稿の入力は、A4縦置き横書き、1枚40字40行で入力(手書きでも可)図表、写真を組み込んで作成頂いても、別途、図表・写真だけでまとめ、挿入箇所を指定して頂いてもよろしいです。(カラー希望の写真も、原則的には本文中にモノクロで掲示し、グラビアでカラー掲示とします)
3. 掲載原稿につきましては、規定の原稿料と掲載誌をお送り致します。

### (本件に関する連絡先)

財団法人日本特産農作物種苗協会

住 所 〒107-0052

東京都港区赤坂2-4-1 白亜ビル

T E L 03-3586-0761

F A X 03-3586-5366